

Daniel T. Rodgers, *As a City on a Hill:
The Story of America's Most Famous Lay Sermon*
(Princeton: Princeton University Press, 2018).

木村 智

I. はじめに

現代アメリカの政治空間でよく耳にするフレーズの一つに、「丘の上の町」(a city on a hill) というものがある。この表現のそもそもの由来は、新約聖書マタイ福音書5章14節の「あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができない」(新共同訳聖書) という箇所である。しかし20世紀末以降のアメリカの政治家たちは、このメタファーを主にアメリカの卓越性・使命感を強調するためのレトリックとして用いてきた。すなわち「丘の上の町」という表現には、アメリカは神に選ばれた特別な国家として世界中の人々の眼差しを浴びており、それゆえその道徳的模範を世界に示さねばならない、という自負が込められているのである。

さて聖書的なルーツを持つこのメタファーだが、アメリカ例外主義の政治的レトリックとしての「丘の上の町」の用法には一つの明確な起源がある。それは1630年に北米大陸に渡り、マサチューセッツ湾岸植民地のリーダーとなったジョン・ウインスロップの「キリスト教的慈愛の雛形」(A Model of Christian Charity) という説教である。このテキストの中でウインスロップは、新たな土地での生活を迎える同胞たちが「丘の上の町」としての自覚・使命感を持って歩んでいくことを説いたとされる。ウインスロップの同説教は、今日のアメリカでも広く読み継がれており、アメリカ国家の礎となったテキストの一つとして言わば聖典扱いを受けている。

しかしなぜ、1630年に書かれたこの特定のテキストの中の「丘の上の町」という特定のフレーズが、近代アメリカの政治言説の中でこれほど重要な地位を得るに至ったのだろうか。このテキストはいつ「発見」され、どのように「継承」され、神話的な扱いを受けるまでになっていったのか。まさにこのような問いに取り組んだ骨太な研究書が、ここに書評するダニエル・ロジャーズ (Daniel T. Rodgers) の *As a City on a Hill: The Story of America's Most Famous Lay*

Sermon (『丘の上の町として:アメリカの最も有名な平信徒説教の軌跡』)である。著者はプリンストン大学の名誉教授であり、バンクロフト賞受賞歴(2012年)のある著名な歴史学者である。本書においてロジャーズは、まず最初にウィンスロップの1630年の説教テキスト自体の分析を試み、続いてそれが19、20世紀を通して「発見」され、ナショナリズムの文脈で定着していくプロセスを丹念に描き出していく。

II. 本書の内容

本書は3部から成り、合計19もの章が収録されている。それゆえ本書評は、全ての章を細かく要約することは控え、むしろ各部の根幹的な主張を押さえつつ、各章の鍵となる具体例を適宜盛り込んでいくことを心がける。

第1部「テキスト」は、ウィンスロップの1630年のテキスト「キリスト教的慈愛の雛形」(以下、「雛形」)そのものの内容・背景についての分析である。筆者は精緻な史料分析によって、今日のアメリカに流布している「雛形」に関する神話的理解を突き崩していく。例えば、これまで「雛形」は、新大陸を目指して大西洋を航行するアーベラ号の船上で読み上げられた「説教」(sermon)だったと一般的に考えられてきた。しかし筆者は、「雛形」のテキストの形式が17世紀のピューリタン社会においてスタンダードだった説教の形式に沿っていないとし、これがそもそも「説教」であった可能性は極めて低いと主張する。例えば、当時のピューリタンの説教は聖書中の特定の一節を引用・釈義する形で展開していくのが常であったが、ウィンスロップの「雛形」はこの形式を取っていない(p.25)。またこのテキストが実際に聴衆の前で「読み上げられた」ことを証明する17世紀の史料は存在しないとし、この点さえも20世紀中葉の「捏造」であると筆者は指摘する(p.28)。

さらに筆者は、ウィンスロップが(のちのいわゆる「アメリカ例外主義」に繋がるような)明確な選民意識を持っていた可能性にも疑義を呈する。先述の通り、現代のアメリカでは「雛形」およびその中の「丘の上の町」という箇所は、アメリカの卓越性・使命感を象徴するものとして引用される傾向にあるが、ウィンスロップ自身には決してそのような意図はなかったであろうというのである。確かに当時のピューリタン社会・教会には神との「契約」(covenant)を結ぶという観念があり、ウィンスロップもこれを共有していた。だがこれは、その契約を結んだ共同体が他の共同体よりも優れているとか、神に選ばれているということではなく、実際に「雛形」のテキストを読んでもニューイングランドへの入植者を「(神に)選ばれた」(chosen)民として特別視するような箇所は見当たらない。

確かに時代が経つにつれてニューイングランドを「新しいエルサレム」とみなす選民意識が強まっていったことは事実だが、1630年の入植時のウインスロップにはそのような思い上がりはなかったと筆者は主張する (p.50)。

それでは、「雛形」がニューイングランドの優越性・選民性を説くテキストでなかったならば、それは一体何を説くテキストだったのか。ここで筆者が強調するのが、「雛形」が持つ、当時の社会の経済問題に対する鋭敏な眼差しである。基本的に当時のピューリタン社会は、資本主義システムを肯定するものであり、そこから生じる貧富の差は自然なものとなみなされていた。実際、第一世代のニューイングランド入植者たちも貧者と富者の混成であった。しかし筆者によると、これらのピューリタンたちは市場経済の「仕組み」の中で暮らしていたものの、市場経済の「モラル」をも全面的に受け入れていたわけではなかった (p.97)。むしろウインスロップは、個々人が私利私欲に駆られて商売・投機・貸付を続ければ貧富の差は拡大し、社会の紐帯が崩壊してしまうと憂慮していた。そしてこのような無規制な市場経済に対する危機感ゆえにウインスロップが「雛形」の中で強調したテーマこそ、共同体の構成員間の「愛」(love)、「慈愛」(charity)であったと筆者は指摘する。筆者によれば、ウインスロップのテキスト中の「我々は偽りなく、互いを兄弟のように愛さねばならない」、「我々は自分自身の物だけでなく、同胞たちの物についても思いを馳せねばならない」などの表現には、「我々」という一つの実体への強烈なこだわりがあり、また市場経済の弊害を愛・道徳の力によって和らげようとする意図が込められていたのである (p.120)。

第2部「ネーション」は、ウインスロップの死後しばらくの間忘れ去られていた「雛形」のテキストが19世紀以降に再発見されていく経緯を描き出す。「雛形」が再版されたのはウインスロップの時代から実に200年近くが経った1838年のことだった。ジョージ・フォルサムなるアマチュア歴史家の働きかけにより、マサチューセッツ歴史協会がその出版に踏み切ったのである (p.135)。しかし再版された「雛形」が当時の人々の注目を集めることはほとんどなかった。確かに当時の一部の歴史家たち (例えばジョージ・バンクcroft) が同テキストに言及する場合はあったが、その中の「丘上の町」という箇所が引用されることはなかったという (p.136)。つまりこの時点では「雛形」の神話化はまだ起きていなかったと言える。

ただし「丘上の町」というメタファー自体は、「雛形」中の表現である以前に) そもそも聖書の表現であるため、19世紀のアメリカではよく知られていた。実際、独立後の新国家のアイデンティティを確立したいアメリカ人たちは、「雛形」とはまったく無関係に) この聖書のメタファーを政治的なレトリックとして用いる場合があったという。その好例が1828年7月4日のニューハンプシャー

州ポーツマスにおける、ウィリアム・プラマーによる独立記念日演説である。この演説の中でプラマーは、「(アメリカは) 丘の上にある町であり、隠れることができない。(アメリカは) 山の頂に輝く灯台であり、諸国がその光と教えを仰ぐのである」と豪語している (p.139)。このようにマタイ福音書の「丘の上の町」メタファーを新国家のナショナリズムの文脈で用いる事例は19世紀を通じて散見されるものの、この時点ではこのメタファーは決してウインスロップの「雛形」とは結び付けられていなかった、と筆者は言う (p.140)。

20世紀転換期になるとこの状況に小さな変化が生じる。この時代のアメリカは帝国主義的な膨張を遂げつつあり、世界における軍事的・道徳的なリーダーとしての自意識を強めていた。そして1916年に、ウインスロップの「雛形」のテキストが、小冊子の形で再版されることとなる。その編集・解説を担当したのはハーバード大学の歴史学者サミュエル・エリオット・モリソンであった (pp. 181-182)。しかし、ウィルソン大統領を含む当時の政治家や国民がこのテキストに関心を示すことはなく、この時点でもまだ「雛形」の神話化は起きていなかったと言える (p.182)。

第3部「アイコン」では、20世紀後半以降、「雛形」とその「丘の上の町」メタファーがいよいよアメリカの政治の表舞台に姿を現していく過程が描き出される。その予兆自体は実に20世紀前半からあったと筆者は指摘する。はじめのうち、それは主にローカルな現象であったという。例えば1930年のボストンにおける入植300周年記念イベントの際、ボストン・コモンに「父祖たちの記念碑」という名のレリーフが設置され、そこにはあの「丘の上の町」という箇所を含むウインスロップのテキストの引用が刻まれた (p.190)。さらにウインスロップの「雛形」とその「丘の上の町」メタファーをピューリタニズムの精髓として世に認知されるまでに押し上げたのは、20世紀中盤に活躍したハーバード大学の歴史家ペリー・ミラーであった。ミラーはピューリタン神学の本質をその「契約」(covenant) 概念に求め、その観点からウインスロップの「雛形」を再評価したのである。つまりミラーの読みによれば、「雛形」とは、新大陸への移住に伴う不安や恐れの中でピューリタンが神との間に結んだ高邁な「契約」と、それに伴う「責務」(obligation) の意識の表明だったのである (p.208)。

これらの下準備を経たのち、冷戦期に入ると「雛形」における「丘の上の町」理念が徐々に政治家たちの心を捉え始める。1961年のジョン・F・ケネディのマサチューセッツ州議会での告別演説は、ウインスロップの名前と彼の「丘の上の町」理念に直接的に言及し、議会が本来果たすべき道徳的な責任・使命を説くものであった (pp.223-224)。そしてこれが皮切りとなり、1960年代の他の政治家たち(リンドン・ジョンソン、リチャード・ニクソンなど)も、ウインスロップ

の言葉を政治的レトリックとして使用するようになっていく (p.226)。こうして、実に 330 年もの時を経て「雛形」に政治的息吹が吹き込まれたのである。

そしてその知名度を絶対的なものに高めた人物こそ、1981 年に大統領に就任するロナルド・レーガンであった。元々レーガンには歴史上の偉人の名言を収集してスピーチ用のメモのストックを作る習性があり、ウインスロップの「丘の上の町」も彼のお気に入りのフレーズの一つであった (p.239)。筆者によると、レーガンの「丘の上の町」レトリックを理解する上で重要なのは、1960 年代から 1970 年代にかけての社会情勢である。左派による反戦運動、破壊行為、ドラッグ、ブラック・パワーなどは、保守派のレーガンの目にはアメリカの風紀の退廃と映った。このような状況で、アメリカの道徳心・愛国心の復興を呼びかけるべくレーガンが依拠したものこそ、1630 年の「丘の上の町」という理想であった (pp.241-242)。なおレーガンは「光り輝く」(shining) という形容詞を好み、これをウインスロップのメタファーと組み合わせることで、「光り輝く丘の上の町」(a shining city on a hill) という強烈なアメリカのアイデンティティを創出し、国民の心を掴んでいった (p.243)。

レーガン以降、「丘の上の町」は瞬く間に政治家たちの常套句として定着していく。このメタファーが、レーガン自身の党でもある共和党の政治家たち (ジョン・マケイン、サラ・ペイリン、ミット・ロムニーなど) に受け継がれたことは想像に難くないが、重要なことは、それがリベラルな民主党政治家たちをも虜にしていたということである。マリオ・クオモ、ビル・クリントン、アル・ゴア、バラク・オバマ、ヒラリー・クリントンら民主党の大統領選挙出馬者たちも、「丘の上の町」という魔法の言葉を積極的に用いることで、有権者の心に訴えかけようとしたのである (pp.248-249)。

Ⅲ. 本書の意義

ロジャーズの本書は、近年盛んになっているアメリカのナショナリズム史に関する研究動向の中に位置づけることができる。昨今のいわゆるキリスト教右派の政治進出を受けて、多くの研究者たちがアメリカにおける宗教と愛国主義の繋が

りを歴史的に紐解く作業に取り組んできた¹。それらの研究の中には、植民地時代にまで遡ってアメリカ例外主義の起源を探ろうとするものも見られ、ピューリタン神学やウインスロップの「雛形」についてもその観点から既に多くの分析がなされてきた²。ただしアメリカ例外主義やナショナリズムに関するこのような長期スパンの系譜学的研究には、時代間の言説の継承や影響関係についての厳密な検証がおろそかになりやすいという弱点もある。これに対してロジャーズの本書の特徴は、禁欲的に「雛形」という一つのテキストのたどった軌跡（誕生、忘却、再発見、神話化のプロセス）の分析に専念していることにあり、その記述は見事なほどに実証的なものとなっている。また本書の巻末にはウインスロップの「雛形」のテキスト全文が収録されており、それゆえ本書一つさえあれば「雛形」の全てが文字通り手元にあるようなものであり、研究者には非常に便利な文献となっている。また個々の章が比較的短く、論点も常に明快であることから、学術出版（プリンストン大学出版）であるとはいえ、一般読者をもある程度念頭に置いて書かれた感がある。これは、本書の目的の一つが現代アメリカに流布している「雛形」とその「丘の上の町」にまつわる理解（というより誤解）を打破することであるから、頷けることである。

また本書の刊行は、ロジャーズ自身が意図しなかった形でもタイムリーなものとなった。本書刊行後の最初の大統領選挙を勝ち抜いたジョー・バイデンの大統領就任式（2021年1月20日）の場で、詩人のアマンダ・ゴーマンが「私たちのぼる丘」（The Hill We Climb）と題する詩を披露し、喝采を浴びたのである。この詩の中には「丘の上の町」というフレーズこそ登場しないものの、ゴーマンが用いた「丘」というモチーフにはウインスロップ以来の「丘の上の町」の理念

-
- 1 アメリカにおけるキリスト教とナショナリズムの関わりについての近年の研究として、例えば以下を参照。John Fea, *Was America Founded as a Christian Nation?: A Historical Introduction* (Louisville, Kentucky, Westminster John Knox Press, 2011); Richard M. Gamble, *In Search of the City on a Hill: The Making and Unmaking of an American Myth* (New York: Continuum, 2012); Sam Haselby, *The Origins of American Religious Nationalism* (New York: Oxford University Press, 2015); Kevin M. Kruse, *One Nation Under God: How Corporate America Invented Christian America* (New York: Basic Books, 2015). また昨今のアメリカにおける歴史認識の問題（特にいわゆる「アメリカ＝キリスト教国」史観）に関しては、佐藤清子「現代合衆国における歴史認識と信教の自由理解：キリスト教国論をめぐって」『東京大学宗教学年報』34号（2017年）、45-60頁を参照。
 - 2 例えば George McKenna, *The Puritan Origins of American Patriotism* (New Haven: Yale University Press, 2007); Larry Witham, *A City Upon a Hill: How Sermons Changed the Course of American History* (San Francisco: HarperOne, 2007); Abram C. Van Engen, *City on a Hill: A History of American Exceptionalism* (New Haven and London: Yale University Press, 2020).

を彷彿させるものがあり、既に多くの批評家たちがこの点を指摘している³。22歳（当時）の黒人女性であるゴーマンのプロフィールは、白人男性の権力者だったウインスロップのそれとはかけ離れており、そこに興味深さがあると言えるだろう。これは、現代アメリカにおいて「丘の上の町」言説の影響力がいかに大きいか、またその内容・担い手が歴史を通していかに変化してきたかを示す事例だと言える。そしてこのような歴史的ダイナミクスを理解するための手助けとなるものこそ、ロジャーズの本書なのである。

さて本書に関して評者が特に感銘を受けたのは、その随所に散りばめられたトランスナショナルな視点である。確かに本書の主眼はアメリカのナショナリズムであるため、必然的に記述の大半はアメリカ内部に関するものとなっている。しかし同時に筆者はいわゆる環大西洋的な視点を持ち込むことで、「丘の上の町」言説を立体的に浮かび上がらせようと努めている。その好例が、第1部第4章「神聖な諸実験の世界の中でのニューイングランド」である。現代のアメリカでは、17世紀のピューリタンは強い選民意識・使命感を携えてニューイングランドに渡ったというイメージがあるが、筆者は同時期にヨーロッパから新大陸に渡った他の諸集団と比較することで、このイメージを相対化していく。筆者によれば、当時の大西洋世界は「霊的なビジョンで溢れかえって」おり（p.59）、例えばスペインから来たカトリック（フランチェスコ会）、オランダから来たカルヴァン派、英国から来たクエーカーなどの諸集団も、自らの入植活動を、神に奉仕するための聖なるミッションとみなしていた（pp.61-69）。つまりこれらの諸集団もそれぞれの仕方で「例外主義」的な自意識を持っていたのであり、ウインスロップらニューイングランドのピューリタン移民たちが特に際立っていたわけではなかったのである。実のところ、これらの同時代の諸集団のパワフルな例外主義の言説と比べると、ウインスロップらピューリタンの選民意識・例外主義のトーンはむしろ「控えめ」な部類に属していたとさえ言えると筆者は指摘する（p.70）。このように筆者は、ヨーロッパ各地からの移民集団の資料を広く検討することによって、ニューイングランドのピューリタニズムにまつわる神話的イメージを相対化することに成功していると言えよう。

筆者のトランスナショナルな洞察が輝くもう一つの章は、「アフリカに丘の上の町を建てる」という示唆的なタイトルを持つ第2部第12章である。この章で

3 ゴーマンのこの詩を、ウインスロップ以来の「丘の上の町」言説の伝統の中に位置づけた論評は既に枚挙にいとまがないが、例えば以下を参照。

Nicole Renée Phillips, "Amanda Gorman's 'City on a Hill,'" *Religion & Politics*. March 23, 2021. Web. URL=<https://religionandpolitics.org/2021/03/23/amanda-gormans-city-on-a-hill/> (accessed July 24, 2022).

筆者は、19世紀アメリカの黒人たちによる西アフリカのリベリアへの入植活動を検討し、そこに「丘の上の町」言説が複製されていることを指摘する。この入植プロジェクトはアメリカ植民協会（American Colonization Society）によって1820年頃に開始されたものであり、そこには当初から、アフリカに住む「異教徒たち」にキリスト教信仰と文明をもたらそうという尊大な理念があった。そしてまさにその文脈で用いられたのが、「丘の上の町」というメタファーだったという。つまりリベリアへの入植者たちは、自分たちがアフリカの人々のための「模範」となり、またアフリカ大陸全体を照らし出す「灯台」になるのだという使命感に駆られていたのである（pp.160-161）。

筆者によると、このリベリア版「丘の上の町」言説が、ウインスロップの「雛形」から直接的なインスピレーションを得ていたとは考えられない（pp.163-164）。（その理由は上述の通り、19世紀のアメリカでは「雛形」のテキスト自体がほぼ忘れ去られていたためである）。とはいえこの事例は、アメリカ国内で醸成されつつあったナショナリズムとその一環としての「丘の上の町」の理念が、大西洋を横断してアフリカに投影された事例として極めて示唆に富む。そこから浮かび上がる今後の研究課題としては、リベリア以外の各地域についても似たような言説が見られないかと検討してみることであろう。例えばアメリカ人の宣教師、商人、軍人などが進出した世界の各地域において、「丘の上の町」言説がいかに散布され、また変容を遂げていったのか、と問うてみる必要があるだろう。

このように本書には、安定感ある議論展開に加えて、幾多の革新的な視点が散りばめられている。とはいえ欠点が皆無というわけではない。本書を通じて主に扱われるのは白人男性のエリートの言説であり、いわゆる社会史的な視点は全体として希薄である。例えば本書にはジェンダーの問題への洞察が欠けているため、アメリカ史を通じて女性たちが「丘の上の町」言説の構築においてどのような役割を果たしてきたかが解明されていない。同様のことは人種的マイノリティについても当てはまる。上に挙げたリベリア入植に関する議論を除けば、本書を通じて黒人やネイティブ・アメリカンへの言及は稀である。その結果、これらの諸マイノリティ集団が、白人プロテスタント主体の「丘の上の町」言説とそこに潜む偽善性をどのように捉え、またそれに対して抵抗ないし修正を試みていったのかが明らかにされていない。後続の研究者たちに残された課題は、これらの非白人男性の諸集団をも議論の射程に入れることで、「丘の上の町」言説についてのさらなる立体的な描写を試みることであろう。